＊＊　トナカイひろいました　＊＊

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＊＊　トナカイひろいました　＊＊

【Ｎコード】
Ｎ０３４８Ｚ

【作者名】
汐井サラサ

【あらすじ】
（短編投稿可能な長さではありますが、閲覧する際のことを考慮して連載形式にさせていただきました。一度に全話更新。一応読み切りとなっています＾＾）
クリスマス直前の忘年会の帰り。私、園枝凜夏――社会人二年目、彼氏なし。自由気ままな一人暮らし――は、拾ってしまったトナカイを……。
ちょっぴり笑えて、ちょっぴり苦くて、ちょっぴり甘い。
そんなクリスマスのお話です。※女性向けです※

第一話

季節柄仕方ないと諦めている。

「……行き倒れ」

「誰が行き倒れだ、こら」

喋った。

その上、持ち帰ってしまった。否、違う。断じて違う。絡まれたのだ。確実に。この変質者としかいいようのない……見るからに怪しい、トナカイに。

――　……　――

私は少しアルコールの入った身体の火照りを醒ますように、師走末の冷たい風を切って歩いていた。

クリスマスを間近に控えた忘年会とか最悪だ。

どういう流れか普通に飲んでいただけなのに、嫌いなタイプの男性社員に絡まれて、ポッキーゲーム紛いなことを強要された。あの顔が鼻息が掛かるくらいまで、正面に来たことを思い出すと腹立たしいというのを通り越しておぞましい。

そんなわけで、お酒が進んでしまった。

タクシーを断って歩いていると、リア充カップルが目に付いて仕方ない。三歩進んだ私に迷惑の掛からないところで爆発しろ。そうリアルに思ってしまうくらい憎らしい。羨ましいわけじゃない。羨ましいわけではっ。

というか数日前まで私だってあの中の一人だった。あのクソ男が、馬鹿なことさえしなければっ！

『あー、ごめん。この間のコンパで意気投合しちゃったなっちゃんと、やっちゃった』
「は？」
『そしたらさー、お前より相性が良いっていうか、凄くて。もうこれ別れるしかないよな？』

分かるだろ？　って、わっかんねーよっ！！
思い出しイラつきに、がんっと足元に転がっていた石を蹴った。蹴ったら偶然ぶち当たってしまったのだ。路上の隅に野たれ死んでいたトナカイコスプレの雄に。しかもこめかみ。だらだら出血しちゃって良い迷惑だ。
放って帰るわけにいかなくなってしまった。

……　――そして今に至るわけだ。

「傷の手当てまだ？」
「今からやる。消毒液ないから、アルコールぶっ掛けて良い？」

因みに焼酎だけど。駄目なら調理酒もある。

「はぁ？！　お前何いっちゃってんの？　良いわけないだろー」
「……だってないんだもん」
「それならそれで、舐めようか？　とか可愛らしい仕草くらい出来ないのかよ、いきなり、アルコールぶっ掛けるってどこのおっさんだよ」

このボケトナカイが……傷口舐める馬鹿がどこにいる。大体それを可愛いだなどという、男が居るから……。ああ駄目だ全身全霊を掛けて、今現在男性不審というか……生物学上雄というだけで毛嫌

い出来る。ちっと口内で舌打ちしてから、にっこり作り笑顔。

「舐めようか？」

「俺に媚びようっていうには年取りすぎだ」

……こいつ葬って良いですか？

――　……がしっ。がらがらがら、ぴしゃんっ！

首根っこ引っつかんで、ベランダに放り出してみた。一瞬何をされたのか良く分からなかったのか、トナカイの動きは止まっていたが外気に触れて頭が冴えたのだろう。角の横に愛らしくある小さな耳がぴるるっと震えた。そして、無言ですっくと立ち上がると……

どんどんどんっ！

と派手に窓を叩きやがる。

「開けろっ！　この馬鹿野郎っ！　いや、鬼女っ！　こんないたいけなトナカイを寒空の下に放り出すとはどういう了見だこらーっ！！　さっさと開けろっ！　りんりんっ！」

――　……がらっ！

「りんりんいうなっ！」

バキッと殴り倒した。

これ以上騒がれても近所迷惑だから一応室内に入れてやる。私の酔いはすっかり醒めた。

「ていうか、なんで私のことを、い・た・い・け・な・トナカイが、りんりんなんて呼ぶの？」
「園枝凜夏（そのえだりんか）だろ、書いてあるんだからそのくらい俺でも分かる」
書いてある？　どこにだ。私は名前入りの何かを持ち歩いている覚えはない。
「……あえて突っ込まないわ。あんたの名前は何？」
「りんりん。寒い。あったかいもの飲ませろ」
私が問質そうとした先には誰も居なかった。さっさと部屋の中央にあるコタツにすっぽりと納まって、トナカイは蹄でコツコツ台を叩く。蹄で。蹄。着ぐるみだよね？
ご立派に天井を指している角を、がっと掴んで、
「ちょっと角邪魔」
ごんっとコタツの台に頭を沈めた。そして、台に突っ伏したトナカイの後ろを通り過ぎると、一応、私が加害者（現在進行形で）らしいから、ココアとか淹れてやった。
「はい。どうぞ」
ことりとコタツに置き、自分の分も入れたからそれを両手に包み込んで、私もコタツに入る。ああ、コタツは平和だなぁ。ずずっ。ココアも甘くて美味しいし。
「りんりん」
「だから、勝手にりんりんいうな」
「お前これ見て何も思わないの？」

「は？」

再びトナカイはコツコツと台を叩く。うるさいな。

「は？　じゃなくてな、飲めないだろっ！　これじゃっ！」

「あんたが着ぐるみ脱いだら良いだけでしょっ！」

「はぁ？　何いっちゃってんのりんりんちゃん。俺トナカイなの。サンタクロースの婆に日々こき使われる可哀想なトナカイなの。着脱できるわけねーだろーがっ！　この馬鹿」

お爺さんではないのか？　どっかのお店のイベントだろうか？大人向けならきっとサンタのおじいさんよりはお姉さんの方が受けが良くて当たり前だ。にしてもなんでこんなにこのトナカイは偉そうなんだ。人の家に上がりこんだ上に、勝手に寛いで……勝手にコタツつけて勝手にエアコンのスイッチまでオンしたのはこの男だ。

ああ、そうか、押すには不便しないのか。

第二話

――　……ずぽっ

「はい、どうぞ」

私は苛々しつつも、一度台所に戻りトナカイのカップにストローを突っ込んで再び座った。

「って、お前」

「何」

「これで良いと思ってんのかよ！」

「……口は良く回るんだから、使えるでしょ」

「熱いだろ！　俺はデリケートなトナカイなんだよ。猫舌なんだよっ！　ストローなんかで飲めるかっ！」

トナカイならトナカイ舌だろう。

うるさいやつだ。

仕方なくもう一度立ち上がって台所を往復する。このクソ寒いのにどうしてこんなトナカイのわがままに付き合わなくてはいけないんだ。

「……何する気だ」

危険を察したのか、トナカイは器用にコップを私の手元から反らした。

「氷入れるんだよ。冷えれば問題ないでしょう？」

「お前馬鹿だろっ！　馬鹿だよなっ！　俺はあったかいもんが飲みたいっていったんだぞっ！　それをアイスココアにしてどうするんだよっ！」

トナカイは鼻だけでなく、頬まで赤くして怒っている。

鼻。

塗っているのかな？　赤いな。

仕事とはいえ、お気の毒だ。それがなければ、それなりに見れない顔ではないだろう。黒に近い緑色の瞳は特に綺麗だと思う。

トナカイコスしているけれども。

「手、冷たいから早くカップ出しなさいよ」

「嫌だ、ふーふーしろ」

お前がしろよ。いっては駄目か？　いったら駄目なのかっ！

とりあえず、氷をシンクに放りに戻って、もう一度トナカイの傍によるとカップを抜き取った。蹄で支えているだけだからあっさり抜ける。片手にカップ。空いた手で……。

――　……がらがらがら、どんっ！　ぴしゃんっ。

「外なら直ぐに冷えるわよ」

ヤツの首根っこを掴み、もう一度放り出した。

二度目だというのに、刹那きょとんとするところがちょっと可愛い。……可愛い？　いや、それはトナカイコスの間抜けさからだ。

ちょこんと上向きな尻尾が、ぴくんっと空を指して可愛いとか思わない……というか、尻尾まで動くとはかなりリアルだ。

どこのお店の人だろう。

どっかりと胡坐をかいて座り、器用にマグカップを持ち上げて啜っている。ほわりほわりと上がる湯気が……なんというか哀愁を漂わせる。ちょっと可哀想になる。

がらがらっと窓を開けると、こちらを見上げたトナカイに、ふんっと空になったマグカップを差し出された。反射的に受け取れば「さみぃ」と何事もなかったように入ってくる。

「……寛いでるところ悪いけど、帰ってもらえませんか？」

「嫌」

「は？」

「帰りたくない泊めて。ああ、石がクリーンヒットしたところが痛い、駄目だこれ、帰るの無理、絶対無理」

もぞもぞとコタツの中へと沈んでいく。

「……トナカイさん。お話があります。ちょっと座りなさい」

ぺしぺしと、私もコタツに座って台を叩く。

私の台詞に肩まで潜り込んでいた大きな身体をずるずると出してきた。どこまで人ん家で寛ぐ気なんだ。

「石を当てたのは悪かったと思っています。すみませんでした。でも、もう乾いてるでしょう？　かすり傷じゃない。手当てだってあんたが勝手に拒んだんだから、私にはそれ以上出来ることはないし、私は明日も仕事で、さっさとお風呂に入って寝たいの。帰ってください」

びしりと玄関を指差した。トナカイは人の話を聞きながら……こともあろうか

「寝るなっ！」

ごんっ！　ご立派な角を引っつかんで台に叩きつけた。

「〜〜〜っ、痛ぇ」

舟を漕いでいるお前が悪い。

「帰れ」

「だから、嫌だって。俺此処に泊まることにしたの。風呂なら入って来いよ。一緒に入りたいなら付き合っても良いけど」

机に突っ伏したままこちらを向いてにやりと笑う。コタツと仲良くなったせいで額が赤いし鼻も赤い。間抜けとしかいいようはない。

「大丈夫だって、セックスがヘタすぎて男に捨てられるような女襲わねーよ」

――　……　な　ん　で　す　と　？

ぴしっ。

「あんた、あの男の知り合いなの？」

自分でも驚くほどの低音が出た。

「あの男ってなっちゃんとラブラブのヤツ？」

ひくりと頬が引きつる。

「知り合いじゃねーよ。全然」

「じゃあ、なんでそんな詳細まで知ってるのよ」

「そりゃあんたに書いてあるからだろ」

「……どこにも書いてないわよ。書くわけない」

私はブログをやっているわけでもないし、ＳＮＳで日常を赤裸々に綴っているほどの暇人じゃない。あいつがそれをしていたかどうかは知らないけど……そうか、あの馬鹿、あることないことそういうところに書き綴っていて、このトナカイはその読者だったのかもしれない。

「違うって」

「何が！」

「べっつにー、なんなら俺が教えてやろうか？」

「……は？」

何を誰が教えるって？　私の思考はあいつへの苛々で追いつかない。

「だーかーらー、セックスに決まってんじゃん」

決まってねーよ。

この脳内常春のトナカイ、誰か滅してくれ。

爆発しろ。

塵と化せ。

ゆらりと立ち上がった私は、そのまま足を上げてボケトナカイの頭を踏みつけた。

ぐりぐりぐりぐり……

「い、て、い、たたたたた……っちょ、ど、動物、虐、待……」

「黙れ変態。黙れコスプレ男」

「ギブっ！　ギブギブッ！　ギブアップです。りんりん許してっ」

分かれば良い。

私が足の力を緩めたと同時に、痛みにぎゅーっと閉じていた目を開けると

「すげー、眺め」

がんっ！　ぐりぐりぐりぐり……学習能力ゼロのトナカイに繰り返した。

それから、りんりんいうな。なんか凄い陽気そうな響きだ。私には似合わない。

よいしょとトナカイの頭から足を降ろしたら、トナカイは、はふーっと深く嘆息した。

まあ、加減なしでやったから痛かっただろう。自業自得だ私は謝らない。

「素で居れば良かったんじゃねーの？」

「は？」

「暴力女だけど、大人しくて可愛くて良い子を作ってるより、マシじゃね？」

起き上がって「角折れてねーよな」と角の確認をしつつそういったトナカイに返す言葉もなく、ぽすんっと私は座り込んだ。

「――　……にが、」
「は？」
「あんたに、何が分かるのよ！」

ずっと、ずっと好きだったんだ。
彼に見て欲しくてダイエットも頑張ったし、化粧だって綺麗に出来るように勉強した。ファッション雑誌だって沢山愛読して、おしゃれの勉強もして……愛されたくて、愛されるように、ずっと頑張って、私なりに努力してきた。私は頑張ったのにっ！　頑張ってたのに！　結局あんな理由で捨てられた。

第三話

――　……コツ。コツコツ。

「……痛いんですけど」

「へ？　いや、泣かれると面倒くさいし、俺が泣かしたみたいじゃね？　だから、撫で撫で、りんりん良い子良い子と……」

そうか、これは小突かれていたのではなくて撫でられていたのか。

頭の上に乗っかったトナカイの前足を、ぺっと払った。

撫でるなら撫でるで、着ぐるみくらい脱ぎなさいよね。と、いう気にもならない。

私はがっくりと肩を落としたまま「お風呂はいってくる」とトナカイを追い返すことを諦めて、シャワーを浴びることにした。もう、随分酔いも覚めたし。大丈夫。

明日はクリスマスイブだというのに、私は変な拾いものをしてしまった。

今夜は終電も終わっただろうし、どこに住んでるんだか知らないけど……朝一で追い出せば良いか。

わしわしと髪を拭きながら部屋に戻れば、トナカイはコタツで丸くなって寝てしまっていた。

ぺたんっとその傍に腰を降ろし、毒づいていた偉そうなときとは違い、可愛らしく――間抜けというほうが正解かもしれないけど――くぴぴっと眠っているトナカイを眺める。

着ぐるみ蒸れたりしないのかな？
なんか変な汗かいて湿疹とか出来そうな気がするんだけど。

そぉっと撫でてみる。
う、わぁ……良く出来てるな。本物みたいだ。固くてごつごつした短毛。これどうやって着てるんだろう？　皮膚もうにんうにんってなるんですけど。リアルすぎる。ぷくく……。

ふはーっ！　手のひらにくすぐったいっ！　え？　なんか気付いたのかな？
耳が動いた。
ぴるるって……何払ってんのっ！　ちょ、可愛い。角も綿とか詰まってる感じじゃないなー……。

「……っう、鞭は、やめ、ろ……って」

唸って寝返りとか打つからびくっとなったけど。寝言が怪しすぎるんですけど。どんなお店にお勤めの方ですか？　あまり親しくなりたくないタイプだな。

うん。
きっとそうに違いない。

「あ」

転がっている向きが変わったから、丁度こめかみの傷が目に入った。

かすり傷だ。
すりむいた程度。数日で治ると思う。

酔ってたから、そのくらい！　って強気に出たけど、実はビビリだから、相当ドキドキした。傷害罪とかで訴えられたらどうしようかと思った。そんな心配要らなさそうで良かった。にしてもなんで、あんなところに捨てられてたんだろう。

休んでいたという場所じゃない。

「絆創膏……」

そうだ。

そのくらいなら、と、ふと思いついて、身体をベッドサイドの方へ向け小さな棚へと手を伸ばす。

ごそごそ……あったあった。キティちゃんだけど、まあ、良いよね。

嫌なら直ぐ剥ぐだろうし。

私は目的のものを発見して元の位置に戻り、再度じーーっと眺める。そっと腰を折って、前に流れてくる邪魔な髪を耳に掛け後ろへと流す。

「――　……」

ちゅっ。

軽く傷口に唇を寄せた。ほんの少しだけ血の味がして苦味が口内に残る。少しだけ早くなる鼓動と高くなる体温が心地良い。

「ごめんね」

小さな小さな声で謝った。ちゃんと悪いと思ってます。

ぺた……っと。ぷっ。トナカイにキティちゃん。かなり異色カップリングだ。
可愛い可愛い。よしよしと一人頷いた。

――　……　――

「どうしたの？　凛夏。今朝は若干ぼろくなってない？　あ、ああ、昨日のショック引きずってる？」
事務所に入る早々同僚にそう声を掛けられた。昨日？　昨日のショックってなんだ。昨夜の最大の誤算は、トナカイを拾ったことくらいだ。

「確かに、あの顔があそこまでくるときついよねー」
「え？　あ、ああ！　そ、そうだよね」
はは。同僚には悪いけど忘れていた。

今朝目を覚ましたら、目の前にトナカイの顔があったのだ。
もちろん、一緒に寝た覚えはない。コタツで爆睡していたから、ブランケットを突っ込んで寝冷えしないように一応気を使ってやったつもりだ。手当てだって一応した。
それなのに、いつの間にかベッドに潜り込んでやがった。
あの獣。
トナカイだから獣か、いや、着ぐるみ脱げよ。

寧ろそれで助かったのか。蹄ではなにも出来ないだろう。うん。と、納得して落ち着こうとしたのに「口があれば大抵のことは出来る」とのたまった。

死ねば良い。

とりあえず、両足で腹部を蹴り倒しベッドから落としたが、それだけでは気がすまないっ。

一人暮らしの女の子の部屋でそんな暴挙を犯すとは！　私もお酒が残っていたとはいえ……成人男性がいるのに爆睡するなんてしくじった。

私の苛々を悟ったのか、彼女はそれ以上突っ込むことはしないで「元気出せ」とぽんぽん肩を叩いて、自分の席に戻った。

ロッカーに荷物を置きにいって、鏡を見たら確かにやつれている。というか、髪が綺麗に整ってない。ぶすっとしたまま私はロッカーにおいてある、スプレーを使って一通り直していく。

昨日だって祭日だ。

今日なんて土曜日だ。なぜ私は仕事してるし……。

振られたショックから、あっさりと休日出勤を変わってしまったのだ。私の馬鹿。仕事してれば虚しさを少しは忘れるかと思ったけど、余計に虚しくなってくる気がした。

第四話

ＲＲＲ……ＲＲＲ……ＲＲ……

さて、事務所に戻ろうと思ったら、ケータイが鳴った。切るの忘れてた。バッグからケータイを取り出せば、メールだ。

「う」

タイトル見ればあいつだ。

今更なんだというんだろう。新しい彼女自慢だったらどうしよう。面倒臭すぎる上に、やりきれない。

『今夜暇？　一緒にすごそう？　ケーキ買って行くからさ』

どういう了見だ。

物凄く困惑した。困惑して、どきどきして、どうして良いか一瞬にして頭の中がパニックになった。

なっちゃんとやらとはどうなったんだろう？　でも、でもでもでも、元カレと、仲良くイブを過ごすなんて無理だよ。

大きく深呼吸して、勇気を出し、ぱたんっとケータイを閉じた。

ポケットに滑り込ませたのは私の弱さだ。

バッグに仕舞いこんで、もう相手にしないということが出来ない。あっさり切り捨てることが出来ない。

何て返信すれば良いか分からないとか考えてる。

分からないということは迷っているということだ。

私は迷っている。

『やっぱり、凛夏が一番だよ。気付けなかった俺を許して』

昼時にメールがまた入った。

胸がきゅっと痛くなった。それは私のことが好きだということだよね？　私とまたやり直したいということだよね？　私が好きだっていってくれるんだよね？

別れ話をされたとき、あれだけ最低だと心の中で罵って、悪態付いて傷付いたのに、どきどきしてしまっている自分が情けない。

でも、そっか、なっちゃんには捨てられたんだな。ぼんやりとそんなことを考える。

――　……セックスがヘタすぎて捨てられるような女。

むかっ！　なぜか突然トナカイの台詞を思い出した。

べ、別にHだけが付き合っている上での価値じゃない。現にそれに気が付いたから彼は私のところに戻ってくれるって……。

――　……素で居れば良いんじゃねーの？

素の自分を受け入れてもらえるか不安で、ずっと猫を被り続けて結局捨てられたのに、私はそんな人を許すの？　そして、また猫を被り続けるの？

また、私は返信が出来なかった。

十八時過ぎに会社を出ると、またメールが入った。

『プレゼントもちゃんと用意したから。ご飯食べに行こうか』

……どうせ、使いまわしだ。

別れた女にそんなもの用意してあったはずない。きっとなっちゃんとやらに持っていく予定のものだったに違いない。

そんなもの、欲しくない。

はぁ、と嘆息してケータイを閉じ、今度はバッグの中に仕舞いこんだ。

「酷いな、返事くれても良いのに」

「え」

聞き馴染んだ声に顔をあげれば、歩み寄ってくる人影が。遊歩道を飾っているイルミネーションで視界を確保して見えてくる姿は忘れるはずもない。

「あ、あー、酷いのは俺、か。ごめんね？」

にこり。

不本意ながら心臓が跳ねた。

ふわふわと頬が熱を持つ。

嫌だ、まだ好きだといっているみたいだ。身体が勝手に反応してしまう。

「ついてないよな、二人ともこんな日に仕事なんて」

いって笑った彼もスーツ姿だった。

「ねぇ、なんとかいって。許してくれるよね？　ちょっとした気の迷いというか、」
「……その気の迷いは、もう二度と起きないの？　電話一本で、別れ話をして、メール一つでよりを戻そうって……もう、二度とないの？」

寒さじゃなくて唇が震える。声を出す音が揺れる。
嬉しいとか、良かったとかそういう安堵ではなくて視界が緩む。
「ないない！　絶対ない。凜夏みたいに女の子らしくて、優しい子、居ないって」

で、都合の良い女だろ？　頭のどこかでそんな台詞が思い浮かんだ。
悔しい。
こいつ、絶対に繰り返す気だ。誠意が薄すぎる。悪びれるという空気が足りない。

「私、そんなに良い子じゃないわ」
「えー、そんなことないって、なっちゃんみたいにがつがつしてるわけじゃないし」

うだらうだらと話しているのは分かるけど、彼が言葉を重ねれば重ねるほど……私の腸は煮えくり返る。沸々とした怒りが湧いてきた。一瞬でもどきどきが戻ったとか、嬉しいとかそんなことを思った自分が恥ずかしい。
「いー加減にしてっ！」

――　……ゴスッ！

気が付いたら殴っていた。
平手とか可愛いもんじゃない。グーパンチだ。愛も勇気も持ち合わせていない分アンパンチより確実に強いだろう。
喋ってる途中だったから、彼も意表を突かれたのか「ぶっ！」ってなった。

「馬鹿にするのもいい加減にしてっ！　あんたは私の何も知らないっ！　私の何も、どれだけ、私が頑張って……」

頑張って園枝凜夏という偶像を作っていたか、気がつきもしないで……その上、必死に作り上げてきた私を馬鹿にして踏み躙ってっ！
もう一度何かいいそうだったから、反射的に殴ってしまった。

「っ！」

それとほぼ同時にちりっと鋭い痛みが頬に走り身体がグラついた。
自分が殴り返されたのだと気が付くのに時間がかかり、気が付いたら、じわりと堪えきれない涙が溢れた。自分から殴っておいてなんだけど……痛い。
口の中が切れて血液特有の鉄分の味がする。

「人が下手に出てりゃ、ぼこぼこ殴ってんじゃねーよ、ブス」

お互いに本心が出た。

――　……もう、疲れたよ。

形だけの恋人ゴッコなんてこりごりだ。
私はバッグをぐっと握り締めて、力の限り振りぬいて、彼を殴っ

たあと、やり返される前に逃げ出した。

第五話

はぁはぁ……。

ぐっと家のドアノブを握ったときには完全に息が上がっていた。パンプスで走ったものだから、靴擦れが出来た。ずくずくと鈍く痛む。

がっくりと項垂れつつ鍵を開けて部屋に入ると

「……居るし」

トナカイがコタツで伸びていた。

「あんた、何やってんの？　今日が書き入れ時じゃないの？」

やれやれと零しながら部屋に入れば、うーっと唸ってこちらを向き「腹減って死にそー」とぼやく。

「朝飯くらい用意していけよ」

「朝そんな状態だったかどうかトナカイ頭では覚えてられないみたいね」

「……腹減った」

私の嫌味もスルーみたいだ。

「ていうか、あんた朝から何も食べてないの？」

「当たり前だろ……俺トナカイだぜ？」

……着替えがないにしても部屋に一人で居るんだから、どんなポ

リシーがあるのが知らないが脱いで勝手に家の中のもの漁っておけば良いのに。
そんなことを躊躇するタイプには見えなかった。
「馬鹿だな……何も買ってこなかったから何もないよ……あるもので、何か作ろうか？」
確かスパゲティがあった。
ソースはレトルトの混ぜるだけのやつがあったと思う。基本、美容のために自炊するけど、それすら億劫なときの非常食だ。
「そーしろよー、腹減ったよー。なんか食わせろー」
子どもみたいに腹減ったを繰り返すトナカイに怒る気力が失せた。というか、そんな体力もう残ってない。
私は着替えることもしないで、台所に置いてある小さなダイニングテーブルの上にバッグを置いて、水を張った鍋を火にかけた。
かぽっと蓋をして、上の棚から買い置きしていたスパゲティを取り出す。
「ねぇ、どのくらい食べ、る？」
しっかりと閉まったジップロックをあけながら振り返ったら、トナカイが直ぐ傍まで来ていた。びくりと肩が跳ねてしまった。なんか恐い顔をしている。
「何？」
身体を強張らせてしまったビビリを隠すように、眉間に皺を寄せて問い掛ければ、ぽくっと蹄が頬に当たった。ひやりとして固い。

上手く出来ている。

「血、出てる」

「へ？　あ、あぁ、えっと、乾燥してるから、唇割れちゃったんだよ」

ごしっと手の甲で拭った後、わたわたと答えて無理矢理話を戻した。

「そんなことより、一応、あんたも雄なんでしょう？　一束じゃ足りないかな、二束くらいあれば……」

「殴られたのか？」

「まさかっ！」

「嘘吐くなよ。俺はトナカイで、神使いだ。神使いに嘘は吐けない」

いっている意味は良く分からないけれど、トナカイが真剣に怒っているのは分かった。だから否定も肯定も出来ない。

「節も赤くなってる」

なんとも答えられずに逡巡していると、そっと前脚（？）で手を掬い上げられた。いわれてみれば、確かに赤い。勢いだったから全然気が付かなかったし、じんじんするのは寒さのせいだと思った。

「女の手ってそんなに節が張ってないし、殴ったりするのに向いてないと思う」

「……そう、かもね」

自嘲的な笑いしか零れない。でも、それなら何のためにあるんだろう？

「創り出すためだ」
「え？」
「女の手は創り出すためにあるんだ。食い物だったり、織物だったり、ありとあらゆるものを創り出す。生きるために必要とされ愛されるべきものだ」

あまりにもトナカイの態度が真摯だから、笑う気にもなれなかった。

「そんな壊すことを知らない手を上げられた程度で、殴り返す男は最悪だ」
「そう、かな。そうかも、ね……」

確かにトナカイは夕べ私があれだけやっても一切やり返すことはしなかった。
まあ、やられて当然のことをしているという自覚が合ったからだと思うけど……。

「当たり前だ。男の手は、守るためにあるんだ。大切なものを守り、慈しむためにあるのに、その対象物を壊そうというのは、間違っている。頬、腫れてるじゃないか」
「ふふ、不細工に磨きが掛かって丁度良いよ」

嘲笑的な笑いがこみ上げてきて、それと同時に泣けてきた。
私、ずっと沢山頑張ってるつもりだったのに、彼の中ではずっと”不細工”だったのかもしれない。それまで何度もいってもらったはずの、可愛いとか綺麗だとかそんな褒め言葉も全てチャラにするだけの威力があった。

溢れてしまった涙を飲み込むように、きゅっと唇を噛み締めると、傷口が開いてまたじんわりと口内に血液特有の苦味のある味が広がった。

「そんなヤツのせいで泣くな」

つっと気遣わしげに蹄が頬に触れる。

くすぐったくて、これじゃ、守るのも無理なんじゃないかと思うと、なんとなく微笑ましくて口の端が緩んだ。

そのお陰で少し引っ込んだ涙のお礼をいおうと顔をあげたら、目の前にトナカイの顔があった。

「――　……っん！、、ちょっ！」

意図せず重ねられた唇に驚いて突き放そうとしたら、尚強く唇を押し付けられる。

嫌だと、駄目だと怒って良い局面だと思う。そう思うのに、唇の上を舌先が這い、傷口をちろりと舐めると、ちりっと走る刺すような痛みにきゅっと瞳を閉じてされるままになってしまった。

押し返されないと確信したのか、押し付ける力が緩んで、角度を変えトナカイは私の唇を丁寧に舐める。

僅かな痛みと、暖かさと、くすぐったさと、どきどきで頭の中が真っ白になる。

「ふ……っ、ん……」

カタカタカタっ！

「「っ！！」」

思わずそのキスに答えそうになったところで、火に掛けっぱなしだった鍋の蓋が暴れだし、派手な音を立てた。

「っ、あ……い、痛かったよ、な……悪ぃ……」

「え、あ。う、うぅん」

かちりと後ろ手に火を止めてお互いに顔を見ることなく、ぎこちない言葉を交わし、私は当初の作業に戻って、トナカイは、大好きになってしまったらしいコタツに戻った。

溢れてしまった分を継ぎ足して、もう一度沸かし、塩を入れて一応二束茹でた。

駄目だな、私、何を血迷っているんだろう。

確かに今日はクリスマスイブで恋人たちの憩いの日って感じだけど、いくらなんでも節操なさ過ぎるだろう。

しかも相手はトナカイだ。

……トナカイ？

本当になぜあいつは着ぐるみ、せめて頭くらい外さないんだろう。首を傾げても答えは落ちてないから、もう細かいことを気にするのはやめた。

第六話

「――　……あ」

どきどきを落ち着けようと、こっそり深呼吸を繰り返しているときに突然声を上げるから、またびくりと過剰反応をしてしまった。

「何？」とゆっくり振り返れば、トナカイはほっぺとコタツが仲良くなったままだけど、目が合って直ぐに逸らされる。

「いや、なんでもない」

見ている間に、ふわわっとトナカイの頬が赤い鼻とお揃いになった。

メイクも取れないんですね。どこの化粧品をお使いですか？

なんでもないというのに、まだ何かあるのか、唸っている。

なんだろう？　変なヤツだ。いや、見た目的にも最初から変だけどね？

「……だから、その」

「何？」

「――　……さんきゅ」

「は？」

「だ、だから！　その、絆創膏だよっ！」

吐き捨てるようにそういって、ぷいっとそっぽを向いてしまう。

どこか子どもっぽいその姿にぷっと吹き出してしまう。なんだ可愛いところがあるじゃないか。

そのデコに貼ってあるのは、キティちゃんだけどね！

「ミートソースと、たらこソースがあるけど、どっちが良い？」

「どっちでも良い」

生死を彷徨っているのか、でろーんっと机に突っ伏したまま動きもしない。耳だけが、ぴくんぴくんっと小さく動いている。

……リアルだ。

気にしてはいけない。

ケーキでも買って帰れば良かった。小さく嘆息したあと、ミートソースに決める。

「はい、どーぞ」

でんっとコタツの上に載せたら、トナカイが若干引いていた。

私も作りすぎたと思う。

本当なら私の分も込みだから大した量じゃないんだけど、どうにも食欲が湧かなかったから、一枚の大皿に全部載せた。確かにいい加減にもほどがあると自覚している。

「見た目は豪快すぎるけど、大丈夫！　人気のお店のやつだから、味は保証するよ」

ずいっとトナカイのほうへと押し出せば、眉を寄せられた。

そんなに嫌な顔をすることないだろうに、作らせておきながら失礼だ。と、同じように眉間に皺がよる。

「お前さ、学習しろよ」

「は？」
「これでどうやってフォーク持つんだよ」
こつこつと蹄で台の上を叩く。
「……犬食い？」
「俺はトナカイだ」
細かいことはどうでも良いと思う。
「熱いだろ！　火傷するだろ！　せめて、ふーふーしてあーんってしろよ」
それは個人的に最上級の対応に感じるのですが、トナカイの中では最低限のラインらしい。
思わずご立派な角を掴んでそのままスパゲティー皿に顔を埋めたい気分になった。
そして、それを実行してやろうかと思ったところで
ぐぅ、ぐぅきゅるるる……
と大きな音が。
「ぷ」
我慢出来なかった。
この偉そうなトナカイ、本当の本当に空腹だったらしい。お腹で飼っている虫が激しく訴えてきている。

「きょ、今日だけだよ」

余りに大きな音を出すからおかしくておかしくて、笑うのを我慢出来なかった。片手で口元を押さえつつ、くるくるとフォークでスパゲティを巻き取っていく。

そして、口元に持ち上げて、ふーふー……っと。これで良いのかな？　そっと、軽く唇の端に当ててみればもう熱くない。

これならトナカイ舌でもぶーぶーいわれることはないだろう。

「はい……って、何マジマジ見てんの？」

「へ？　あ！　あぁ、いや、りんりんは笑ったほうが可愛いなと思ってた」

「は、はぁ？！　何いっちゃってんの、ほ、ほら、口開けなさいよ」

だから、りんりんって……もう、そっちは良いや。

なんか赤い鼻と同じくらい赤く頬を染めてそんなことをいうから、こっちまで恥ずかしくなる。

ずいっとフォークを突きつければ、素直にぱくりと口にして、もぐもぐ、ごっくん。

見たまんま。

餌付けだ。

私は今トナカイ飼ってる状態なのだろうか？

「美味しい？」

「腹減ってたからなんでも美味い」

……可愛くないトナカイだ。

まあ、私はパスタを茹でただけなので、それでも文句ないけどね。

もぐもぐと、同じ作業を淡々と繰り返しお皿の中身が半分くらいになったところで「お前も食えよ」と声が掛かった。ようするにお腹いっぱいになったのだろう。

「案外小食なんだね」

「トナカイは燃費が良いんだ」

ふーん……。

トナカイネタにはもう突っ込まない。だって私の理解の斜め上を行くし、聞いて分かるような話をしてくれるとは思えない。世の中知らないことがあるほうが良いだろう。

ぱくん。

もう冷え切ってる。

「――　……あ」

私が残った分を黙々と食べていると、器用にお茶を飲んでいたトナカイの手が止まった。何？　と首を傾げれば「鈴……」と零す。

「鈴？」

「鈴だよっ！　鈴っ！」

意味が分からない。尚首を傾げて、もうひと口と運びかけたところで……

ガッシャーンッ！！

うわぁ……家の中でイルミネーションなんて飾ったつもりはないんだけどなぁ。
盛大な音を立てて、窓ガラスが割れてしまった。室内灯の明かりにガラス片が反射して綺麗だ。
あはは……何この展開。

第七話

「ルドルフっ！　何をしておる。全く、勝手に迷いおって、お主がおらねば仕事にならん」

かつんっ！

ベランダの柵に足が掛かった。

黒のピンヒールのレースアップタイプのレザーブーツだ。

うわあ……、と視線を上げていけば、次は予想通りサンタコスプレの超絶セクシー美女が立っている。右手には鞭を持ち、長い柄を左手にぱしぱしと打ちつけている姿が、決まってる。

明らかにこの人がトナカイの寝言の原因だろう。

そんな不安定な場所に立つと危ないですよ。

それから、家の玄関はあっちでそこはベランダです。

いいたいことは山ほどあるが、口に出来る雰囲気ではなかった。

「げ、サンタ……サンタ来たよ、サンタ……」

微妙にお隣でトナカイさんがガクブルっている。いきなり打たれたり大人の世界が始まったりしないよね？　私そういうのには慣れてないんですけど……見るのも嫌なんですけど……。

そ！　そうだ、話。話とかしてれば、手を挙げている暇がないかもしれない。え、えーっと、何か。

「サ、サンタって、サンタクロース？　白髭のおじいさんじゃない

の」

こんなの話題でもなんでもなーぃ！

ごめんなさい、本当すみませんっ。ていうか、いやその、その格好は明らかにサンタだけど、なんというかどこかのお店のサンタさんだ。店内で超増殖している系。

「なんじゃ、娘は爺が好みか？」

あ。でも、乗っかってくれた。

とんっとベランダへと降りた美女を見れば、そこには白髭の恰幅良いサンタクロースイメージそのもののサンタさんが居た。

「え！」

「ほっほっほ、メリークリスマス！」

白髭がほわんほわんと揺れる。

私がその姿に呆然としていると、サンタは元々あったのかなかったのか分からない白くて長い眉に隠れていた瞳を細めた途端、再び身軽にとんっとベランダの柵に腰掛けた。

「飽きた。もう爺の格好は飽きたのじゃ」

いって、ゆるりと長く美しい足を組み妖艶に微笑む。

そして、整って美しい顔を僅かにゆがませてトナカイを睨んだ。美女は僅かな所作で全てを制する。圧巻だ。一般人の私には、何も口出しが出来ない。

「ルドルフ、早く先導せんか。お主がおらねば他のトナカイが迷うじゃろうが」

「ルドルフっ！　あんたルドルフなんて名前だったのっ？！」

自分でも、もうドコに驚いて良いのか分からないからとりあえず、細かいことに驚いてみた。

盛大な溜息を吐きつつトナカイは「ああ、面倒臭ぇ……」と蹄で頭をごりごりとしつつ女王様の元へと歩みながら「そうだよ」と答えた。

なんだか背中に哀愁を感じるんですけど、大丈夫ですか？

別にこんなやつに愛着はないけれど、それでも、にこやかに送り出す雰囲気でないのは気の毒に感じる。

そんな私に、トナカイはベランダまで歩み出るとこちらを振り返って、ふ……と微笑んだ。

――　……え。

一瞬だったから見間違いかも、もう一度、ルドルフの顔を見てもルドルフは気だるそうな顔をしている。

続けて反射的に胸に手を添える。こっちも気のせいだ。もうどきどきしてない――この状況にはどきどきしているけれど――

「赤鼻のトナカイっていえば、昔も今もずーっとこの俺、ルドルフだよ」

そこは納得しないといけないのか、知らない私が世間知らずみたいな話になってしまっている。

あまりにも女王様と、トナカイ・ルドルフが強烈過ぎて見ていなかったが、その後ろを見るとデカイそりが宙に浮いている。

引いているのはもちろん……だから、どこのお店ですか？　という感じのトナカイコスの男性だ。

私が情報整理も出来ずに混乱している間に、女王様は綺麗に整えられた指先を爪と同じ色に彩られた赤く美しい唇に添えて悩ましげに「ん～」と唸る。

「事故とはいえ、うちのトナカイが世話になったんじゃ。特例ではあるが、何か望みをかなえてやろう」

「は？」

「本来ならば、親や大人の庇護がなければ生きていけぬ子どもにしか許されぬことだが……まあ、何事にも特例というものはある。何でも良いぞ。好きな望みをいうが良い」

寛大な女王様のお言葉に、思わず色んな思考が頭の中をどどーっと流れていく。

望みっ？

そんなものを急に聞かれてなんて答えれば良いんだろう？

夢。そう、夢だよねこんなの。だったら、本当になんでも良さそうなものだけど……。

どど、どうしよう。

身長があと五センチ欲しい？　胸ももう少し形が良く……ああ、こめかみの傍にある染みも消して欲しいっ。

はっ！　それって全部お金があれば出来るか……じゃあ、お金？

時間？　癒し？　世界征服！　って私は厨二病か……なんだろう、い、一個ってどこに絞れば良いのっ！？

パニックで考えれば考えるほど、頭が真っ白になる。

はぁ、と女王様の色香を含んだ溜息にぶつぶつと考え込んでいた頭を上げる。

「我は、女王ではなくサンタじゃ。それにしてもやはり大人は面倒臭いの。望みがありすぎる。一つに絞れ。何でも良い。何でも。対象者が望んだものを叶えるのが我の役割じゃ。その制限は何もない。時間もないぞ」

何一つ口にして居ないのに、人の心を読んだように、呆れた溜息を吐きそう答えた女王様……もとい、サンタクロースに「ちょちょちょ、ちょっと待ってっ！」と慌ててストップを掛ける。

第八話

「トナカイが欲しいといえ」
「は？」
「俺が欲しいといえ」
「は？！　はぁっ！　何でトナカイなんか、いや、あんたなんかいらないでしょ！」

私が散々迷っている間に、トナカイが恐ろしいことを口走った。
「なんじゃ、トナカイが欲しいのか？　トナカイなら、別にルドルフに拘らなくても良いぞ？　好きなのを選べば良い、」

何もいってませんっ！
私トナカイなんていりませんっ！

そう叫びたいのに、女王様は聞きゃしない。
大体偉い人っていうのは人の話を聞く気がない。サンタさんはその典型的なタイプに見える。

とんっと身体を少しだけずらして私からそりが見えるようにした。
「奥から、ダッシャー、ダンサー、プランサー。ヴィクセン、ドゥンダー、ブリッツェン。キューピッドにコメットじゃ、ああ、ルドルフもおるな。どれが良い？」

サンタに呼ばれる順番に、恭しくトナカイは腰を折っていく。
執事喫茶？　いや、トナカイ喫茶だ。いや、需要あるとは思えないんですけど。

「他のトナカイなんて意味ない。俺にしとけ」
「いや、トナカイなんて要らないし……ていうか、あんた何が出来るのよ」
「――　……ぅ、か、家事一般とか？」

なぜ疑問系なんだ。
それは出来ないんだよね。鋭意努力します程度の発言だよねっ！
それだけ押しておきながら売りの一つもないのかこのトナカイ。
気の毒すぎる……。

「う、うるさい」

むぅっと可愛らしく眉を寄せて、拗ねたようにそっぽを向いてしまった。私は何もいってないけど、がっかり感が顔に出ていたのかもしれない。

「誓いのキスまでした仲じゃないか」

なんですとっ！？
この赤っ鼻。何をいい出すんだ！　た、確かにキスはしたけど、されたけど、誓って何も誓ってないというか、あ、あれ？　それって誓ってるの？　いや、誓ってない。困惑。

「なんじゃ、それなら我もごねるわけにはいかんの。良いよ。りんりんにはルドルフをやろう」
「いりませんからっ！！」

それから、女王様までりんりんいうなっ！　私の叫びも、心の叫

びも華麗に無視された。

「まぁ、今宵は仕事があるからの、借りて行くぞ？　終わればりんりんに返そう」

返さないでください。

いりません。

本当に必要ないですっ！

全力拒否の私の姿勢はどこまでも無視される。

「凜夏。良い子で待ってろよ」

こつこつとなぜか嬉しそうなルドルフに頭を小突かれた。

多分、撫でられているんだろうけど、これは確実に小突かれている。私不幸にもほどがあるだろう。泣きそうだ。

「窓……直してから出て行ってください」

駄目だ。疲れた。

こんなわけわかんない、サンタクロースご一行様にお付き合い出来ない。

そう思って口にして、顔をあげればもう目の前には誰も居なかった。窓ももちろん直っている。何事もなかったように、しんっと静かになって……。

「え！」

ガラガラッ！

私は慌てて窓を開けた。

今夜の月は満ち始める直前でとても暗い。

それでも、天上の星と、下界の星が煌き夜は明るい。ベランダの柵にお腹を預けてぴょんと身を乗り出し、夜空を見渡すけれど何もない。

「――　……夢落ち」

ぽつりと口にして、胸の中が涼しくなる。

そうか、夢落ちか。それなら仕方ない、寂しすぎるクリスマスを一人で過ごす私の夢だったのかもしれない。

まあ、そうだよねー……あれだけド派手な音立てたのに近所の人もざわつきもしなかった。

「私きっと疲れてるんだ」

寒さに身を縮めて、部屋に戻る。

ちらと視界の隅に入った食べかけのスパゲティは見ないことにした。なんて、虚しい妄想に浸ってたんだろう。

しかも、トナカイなんて馬鹿げてる。さっさとお風呂にはいって――ちらとそのままになっているシンクを見て――片付けて……そして、寝よう。

＊＊＊

チチチ……。

カーテンを閉め忘れてしまった。
窓から差し込んでくる朝日に、目を覚ます。昨夜は寝付くのが早かったからこのまま二度寝が出来る感じじゃない。
なんだか今朝はやけに重い身体に嘆息し、ごしごしと目を擦る。

「――　……」

もう一度擦る。

「……ぅ、」
「うるさい。今帰ったところなんだから、少し静かに……」
「っい、いやぁぁぁっっ！！！」

何でっ！
なんでなんでなんで！
どうして、どうやって私のベッドの中に男が居るのっ！

動揺のあまり一瞬息を呑んだが、男が声を発したところで、我に返り金切り声を上げた。同時に、手足をばたつかせてどうにか目の前の誰かを蹴り出そうとしたのに、あっさりと両手を掴まえられてしまい、足もホールドされた。

「っひ……」
「そんな怯えるなよ。りんりん」
「り、りんりん？」

私をそんなふざけた名前で呼ぶのは一人だ。
いや、でも、ルドルフはトナカイだった。目の前のは人間だ。角もないし、なにより、私の手を掴んでいる。蹄ではなく、五本の指で。

「間違ってないって、俺がルドルフ。神使いだから、人間みたいに嘘は吐かない」
「……で、でも」

何もいってないのに、私の考えたことが分かるように、そういった男にへなへなと腕の力が抜ける。それにあわせて、捉えていた彼の大きな手も解け身体も解放される。

「俺はトナカイだから、昨夜の役目さえ全うすればあとは自由なんだ。それ以外のときを人間として過ごしたいと思えば人間になれるし、普通のトナカイで居て、のんびりしたければ、そのままで居ることも出来る」
「……そんな馬鹿な」

どう考えても女性の一人暮らしの部屋に忍び込んだ変質者だ。

第九話

私は被害者なんだからここで叩きのめしても罪にはならないと思う。でも、出来るかな？　いや、一瞬の隙をついて警察に通報とかすればなんとか……。

「出来るわけねーだろ。体格的にもりんりんのほうが劣ってるんだ。本気で掛かっても俺が伸されるわけない」

「そう、ですね」

だから、なんで私の考えていることが駄々漏れなんだろう。

私の疑いの目を一身に受け、自称トナカイは、深い溜息をひとつ吐いて、もぞりと動くと額にかかっていた前髪をかきあげて、染み一つない綺麗な額の隅に貼られた絆創膏をぺりっと外した。

「凜夏が、蹴った石が当たったところ。ほら、同じところに傷があるだろ？」

「……　――」

メイク？

私は恐る恐る手を上げて、そっと、その傷に触れてみた。

「痛っ！」

「あ、ごめん」

本物だ。

「当たり前だろ……お前がサンタクロースに望んだから俺はここに居るんだ」

「……望んでないし」

願い事を決めたのはこいつだ。私じゃない。

「そう思うのは勝手だけど、星の数ほどあるりんりんの願いの一つにあったから、サンタは叶えたんだ。というか、叶えられたんだ。本当に微塵も望んでいなかったら俺はここに居ない」

う。

そういわれると自信ない。

確かに、ちょぴっとくらいちょっぴりくらいは思ったかもしれない。思ったか？　思ったかなぁ？

「で、でもなんで人間なの？　トナカイでも問題ないみたいなこといってたじゃない」

なんというか、今のこの状況は普通じゃないと思う。動物保護していたときとはわけが違う。

「それはりんりんが、蹄が固いっていうから……」

ほら、これなら痛くないだろ？　と続けて、つっと長い指先が私の頬を撫でる。

「柔らかいな。気持ち良い」

「っ、あ、あのねぇ！」

なんだか酷く幸せそうにそんなことをいわれると、恥ずかしいっ。ふわふわっと頬が熱持つのを払いたいのに、そのまま頬を包み込んでしまわれると、どんどん熱くなってくるばかりだ。

というか、本当にこいつがあのトナカイなら……年に一回しか仕事のない男だろうし、それってつまり、ひもじゃないかっ！

……私にこいつを養うだけの甲斐性があるだろうか……。

金銭的なことを考えると、やっぱり朝か夜、仕事増やそうかな……年が明けたら追加の仕事でも探さないと……。

「なぁ、」

「え、あ、うん、何？」

「そんな詰まんない心配しなくて良いからさ」

ちゅっ

「っ！　なっななっ」

「驚いて真っ赤になってる顔も可愛いな」

「ななっ」

「俺、嘘吐かないよ。吐けねーし。お前も吐けないけどな、俺に嘘……」

にやりと意地悪く笑ったルドルフは静かに瞼を落として、私にゆっくりと唇を重ねた。柔らかく食まれて腰を抱かれる。

弾くタイミングを逃してしまったけど、でも、でも、これ以上は……だ、だって、

「あ、あんただって、私のミジンコみたいな願いに振り回されるの、いいい、嫌、でしょう！」

「別に？」

トナカイは子どもが初めておもちゃを与えられたみたいに、私の身体のあちこちに触れ時折唇を寄せる。時折絡む瞳の色が、濃い緑

……トナカイのときと同じ色で綺麗だ。
あぅっ！　見惚れている場合じゃなくて！
「べ、別にって、だって、そこにあんたの意志はないじゃないっ！」
「俺、りんりんのこと嫌いじゃない。んー……好き？　愛してる？」
く、首を傾げながらいうことじゃないっ。いうことじゃないけど……ふわふわっと身体が熱を持つ。
「そん、な、わけないじゃない！」
直ぐに手を挙げるし、口は悪いし……素直に優しくなんて出来ない。それに、私まだ寝起きで何も作ってないっ、顔も髪も、そのまま……こんな可愛くない子に好意を寄せる人は居ない。
「恐がるなよ」
大丈夫だからと重ねられる。何が、大丈夫なのか分からない。
「俺、人間ってあんまり好きじゃない。人間ってさ、人の不幸を平気で願うだろう？　自分以外の他人がどうなっても知らない。そういう部分がある……俺の知っている人間はそういうやつが多い」
「そんなこと、そんなことないよ！」
そんなことない。そんなことないから、私はこうやって生かされている。そんな悲しいことをいわないで、いわないで欲しい。そういう言葉はとても切ない。確かに私もリア充爆発しろっ！　なんて暴言吐くけど、本当に不幸になって欲しいわけじゃない。寧ろ永遠に爆発しろといわれ続けていれば良いと思う。

なんだか酷く悲しい気分になって瞳を伏せれば、ふわりと柔らかく頭を撫でられる。今度は本当に撫でられている感じだ。
ふわふわと心地良い。

「お前は良い子だな」
「は？！」
「良い子だよ。俺にも見えた、お前の望みが。お前の望みって全部小さいのな」

くつくつと笑う。
う、馬鹿にされてしまっている。だって急に聞くから、何を望んで良いかなんて分からなくて。

「全部小さくて、他人に害を及ぼさない」
「？」
「あんな目に合ったんだぞ？　その男の不幸を真っ先に願っても良いだろ？」

あ。
そういわれれば、そういう手もあった。全然気が付かなかったけど……いや待て、でも、どう願えば良いんだろう？

階段の最後の一段踏み外せとか？　これは相当どきどきするよ。
自動販売機の前で財布あけたら一万円札しかないとか？　うわぁ、これ可哀想だ。
数量限定のスイーツの列に並んでいて、自分の目の前で売り切れとか。これは泣く。絶対泣かないと駄目なところだ。可哀想過ぎるっ！

「ぶっ」

「は？」

トナカイが噴出した。なんだ？　何事だ？

「あ、はは、駄目、おかしすぎ、りんりん最高面白い。俺やっぱりスゲー好きかも！」

大笑いされながら告白されても、馬鹿にされているような気にしかならない。むすっと眉間に皺を寄せると、ぱくりと眉間を食まれてもぐもぐされる……。

「食うな」

「嫌、食べたい」

「トナカイは草食系です」

「俺今人間だから。気にしない気にしない」

気にしろよ。持ちキャラってもんがあるだろう。

そ、それになにより、その、えーっと、私はHが下手で……捨てられるような……。

「それ、相手の男が下手だっただけじゃねーの？　大丈夫、俺上手いから」

「――　……～～～～っ！！」

どこからそんな自信が来るんだっ！　その上、この男に羞恥心というものはないのかっ！

「んー、嗜虐心の方が強いかもー」

耳元に擦り寄ってそういうと、鼻先で私の髪を掻き分けて、首筋

にちゅうぅっと強く吸い付いた。ちりりっと走る痛みに、痕が残ってしまうっ！　と思ったものの、どういうわけかもう弾く気になれなかった。

そんな私の諦めを悟ったのか、少し身体を浮かしたルドルフは私を真っ直ぐに見つめて頬を撫でると再び静かに降りてきた。

私はただ、迷子で手負い――私がやった――のトナカイを拾って帰っただけだったのに。

何がどうなったらこんな結末になってしまうんだろう。

はぁ……と零しかけた溜息は、トナカイの唇によって塞がれてしまった。

「――　……メリークリスマス、凜夏」

第九話（後書き）

＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

ご愛読ありがとうございました。

ちょっぴり早いクリスマスのお話、楽しんでいただければ幸いです。

こちらは蒼衣さんの主催するＬＬＳ企画に参加させていただくものです。企画の提案ありがとうございます。それがなければ、私はこれを手がけることはなかったでしょう。縁とは貴重なものですね。

それもきっとこのクリスマスの奇跡。

どうか皆さまのもとにも素敵な奇跡が舞い降りてきますように……。

汐井サラサ拝。

＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

＊－＊－＊－＊－＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0348z/

＊＊　トナカイひろいました　＊＊

2011年12月14日16時41分発行